

黒岩涙香と競技かるた

現在の競技かるたは、明治37（1904）年、ジャーナリストの黒岩涙香（くろいわるいこう）が「東京かるた会」を創設し、2月1日に第1回かるた大会を開催したのが始まりとされています。この大会は、東京日本橋で開催され、「会費三十銭、弁当付き。男女関係なく誘い合ってください。」との旨の広告が、黒岩が主宰する新聞「萬朝報（よろずちょうほう）」に掲載されました。東京、横須賀、静岡などから参加者があり、優勝者には萬朝報社からメダルが授与されました。翌年には、「萬朝報」に「小倉百人一首かるた早取り秘伝」を三面に渡って掲載し、現在の競技かるたルールの祖となりました。現在は各持ち札25枚の計50枚で対戦しますが、当時は、予選は各16枚、本戦は各50枚でした。また、それまでの札は読みにくい草書体の文字でしたが、黒岩によって、ひらがなの見やすい活字を用いた「標準かるた」も考案されました。

黒岩は、「マムシの周六」というあだ名がつくくらい、舌鋒鋭いジャーナリストでしたが、小説家、翻訳家、思想家と、多方面で活躍しました。『レ・ミゼラブル』や『モンテ・クリスト伯』などを翻訳し、日本でも愛される作品となりました。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ